

## 和歌七首：文苑

著者	春野，晚翠
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 6
ページ	7 7 - 7 7
発行年	1912-06-20
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6381">http://hdl.handle.net/2298/6381</a>

消息もあらで淋しどものわべる同じ日記かく今日も昨日も  
天がける白馬にめしてわが君の來ませりと見し明方の夢  
わが弟紅人手見て渚邊を千鳥の如くこばしりてきぬ  
あさまじうわが頬をまろぶわが涙それともわかす白蓮の花  
忘れ給へ雨しとくど濡れし宵も加茂の夕もそのくりごとも  
はかなごとかすかぎりなく云ひいでゝ御堂に泣きしそのはじめの日  
つくぐと肘にもたれて欠伸しぬ菫香の葉に五月雨する日  
夏はきぬ紫野ゆく旅人のためかしたる小さき扇に

春 野 晚 翠

首夏風 花ゆゑにうらみし風も夏きては吹くよとはかりいそぎまたるゝ  
遠郭公 ほのかなる初音をもらす郭公いつくの雲のはてに鳴らん  
里卯花 卯花の露の光もさしそひて月とも見ゆる玉川の里  
水邊卯花 初瀬川きしうつ波とみゆるまで枝もたわゝに咲る卯の花  
窓前竹 霜やたひたけともかれすいやましに生ひこそ茂れ窓の吳竹  
朝 煙 家ごとに朝たく煙たちのほり竈にきはふ山もとのさど  
浦 曙 眞帆かけて霞の浦をこく舟の波にきぬゆく春のあけほの